

が選抜試験や入植訓練の記録とともに記され、単身で訓練を受けた入植者の家族との再会、新たな出会いと結婚ラッシュなど、新しい村が新しい家族とともに歩み始めた黎明期の様子が生き活きと描かれている。

第3章では、干拓地という特殊な環境下での営農開始直後に繰り広げられた工夫や苦労が綴られる。重量のあるトラクターがぬかるみで動けなくなることも頻繁にみられたようで、こうした危機を入植者同士が協力して切り抜けたことが新しい村に連帯感を芽吹かせたのだろう。この状況は本書の第6章で触れられる大潟村干拓博物館で復元展示されており、私たちも過酷な環境を擬視できる。心の拠り所、地縁を固める神社の造営も興味深い。

私たちは第4章で、入植条件の厳しさに触れ、条件を満たしたうえで難関の選抜試験を通過して選ばれたエリートとしての農業従事者の感情に触れることができる。今日的な表現を借りると「農地を持続的に発展させる」ための心意気に満ちた人々が大潟村に色を付けていったのである。本文に盛り込まれた、出身地への望郷の念が滲む『村民歌』、あたかも校歌のような希望に溢れる『大潟村民の歌』からは、独立心と誇りに満ちた入植者たちの気概や息吹が感じられる。

第5章は、食管農政に翻弄された大潟村の稲作をクローズアップしている。第一次入植からわずか4年後の1971年に米の生産調整（減反政策）が本格化し、大潟村の米作は難しい舵取りを強要されたのである。そうした環境の下で展開された様々な営農上の工夫が、国家行政と生産現場の相克を炙り出すかのような筆致で記されている。

第6章も、前章に続く生産の工夫が記されている。しかし、ここでは流通までを視程に収めた取組の紹介に力点が置かれており、消

費者の目に触れやすい産直センターの運営をめぐる記述もある。本稿の冒頭部で触れた記事や写真は本章のものである。

第7章は、筆者が現地でのインタビュー調査で得た入植者のライフストーリー2編からなる。政府の食管農政に左右されながらも辛苦を喜びに転化していくたくましさや進取の気性は、故郷を断ち新天地で夢の実現に邁進した入植者たちのDNAなのだろう。本章は「生の声」の収集に成功している点で、一般書としての秀逸な仕上がりに貢献している。

第8章は、著者の主張する青潮文化論を基層として、八郎潟の形成から干拓地での営農までを総括する地理学らしい総合的視点での著述が印象的である。読前に目次を一瞥した段階では、正直「木に竹を継いだ」印象があった。しかし、その懸念は読後見事に払拭された。マルチスケール思考の大切さを教えてくれる点で本書の結論に相応しい章である。

補遺「国際化と日本農業」でも著者が現地フィールドワークから学び考えたことが綴られる。視座としては経済地理学的であり、マルチスケール思考は第8章に共通するものがある。昨今の地理学を俯瞰すると、分析的方向（定量的方向）と省察的方向（定性的方向）への二極分化が明瞭になってきたと感ずることが多い。こうした動静を考えたとき、著者が第8章と補遺の部分で展開したような視点に依拠した教育が校種を問わず必要だろう。

ところで、私たちが日本の営農、とりわけ学習指導要領が必ず取り上げられることを継続して明示している稲作は、米が日本の主食であることを如実に語っている。それゆえに食糧不足が慢性的であった高度経済成長以前の日本では米の生産と供給をめぐる食管農政が折々の国内・国際情勢を睨みながら改訂されてきた。そこでは少なからず水田を粟田にし

たい為政者の思惑も絡んでおり、政府と営農者はある時に協調できても、別の機会には対立することを繰り返してきた。その微妙なバランス加減を私たちは知っておく必要がある。それが、本書に描かれたような地域課題を国家全体や国家間の課題へと昇華させる起爆剤として働くからである。

上述した食管農政に関わって、評者は2020年の初秋に勤務先の附属図書館で開催された企画展の資料解説を依頼された。赴任当初の約30年前ならば「やや専門領域が異なりますので」と尻込みしたような展示物であったが、馬齢だけは重ねた評者は資料解説を快諾した。

その展示資料は、学内で発見された小中学校の社会科用補助教材で、米を中心とした食料（食糧）生産に関わる掛図であった。同資料は表裏8面（4枚）からなる模造紙大の掛図で、個別の見出しはあるが全部を総括したタイトルは付されていない。そこで評者は、解説記事（香川：2020）をしたためるに際して、便宜的に『農業、食料生産にかかわる教材掛図』とのタイトルを付けた。

この掛図は、当時としては珍しいカラー図として1956年に第一法規出版より発行されている。その前年の1955年には上野駅でヤミ米運搬の集団摘発が実施されたことから容易に推察できるように、日本は戦後10年を経ても「飢え」とは完全に決別できない社会経済情勢にあったといえる。

八郎潟干拓地を造成する計画は、このような社会情勢からの脱却、すなわち主食の確保と自給をめざして企図されたものである。実現に漕ぎつけた干拓計画は、本稿で既述のとおり1952年に立案され、1957年に着工をみたものである。当地への第一次入植は1967

年なので、希望に燃えた入植者たちが転入した当時は、米の増産が強く期待されていた。第一次入植の1年前の1966年には、米の配給制の下で1942年から用いられていた米穀通帳が廃止され、1969年の自主流通米制度発足、1971年における米の生産調整本格実施、1972年の物価統制令からの米穀除外へと食管農政は目まぐるしく変わり、著者が本書で語るように米生産農家は翻弄されることになった。

こうした一連の食管農政の推移が大潟村での様々な事業や変化と対照できるような年表は本書に含まれていない。そのことが読者に若干の不便を与える懸念はあるが、抒情的な表現に富む本書では対照年表を割愛した方が読み易いという評価も当然あるだろう。

また、本書は価格抑制を狙って掲載写真は全て白黒でそのサイズも決して大きくない。大潟村のスケールやリアリティを一層感じたい読者には、山下（1997）による『米づくりのむら』の併読をお勧めしたい。この書籍は、54頁の全編が大潟村の米作を扱っており、小学校社会科副読本としても十分に活用できるビジュアル本である。抒情と温か味に溢れた戸井田氏の書籍との併読は、大潟村への関心や旅心を強くかき立ててくれるに違いない。

（香川貴志 記）

参考文献

- 香川貴志（2020）「今月の逸品：農業、食料生産にかかわる教材掛図」、京都教育大学 学びの森ミュージアム 広報チラシ、50、1。
 戸井田克己（2016）『青潮文化論の地理教育学的研究』、古今書院。
 山下清海（1997）『米づくりのむら』（ふるさとの暮らし 日本のまちとむら 4）、小峰書店。